

兼題句選集

(*印は代表句と鑑賞文)

修二云、お水取り

*お松明スマホの明り点々と

内陣の洩れ灯女人の修二会の座

聲明にサンゲサンゲとある修二会

修二会更け五体投地の板の音

*お水取の実見の一つが何と、「スマホの明り」であるとは。僕

にもこの『お水取り』の見物は一つの懂れだけれど、現実はこちら

であると充分想像できる現今の風俗である。『スマホ』などとい

う粗野な語が俳句に馴染むかどうか躊躇する前に、見てしまつた

ものは仕方が無い、と作者はその体験を生かしたのである。

鳥曇

鳥曇大仏様は修理中

*目鼻なき島の地蔵や鳥曇

*僻地に立つ石地蔵、流人の頃まで知っている古い地蔵が海から

の風雨で摩滅している。それでも長い間空を見てきたので自然の

動きを知悉して、鳥の渡りを見守っている風情であろう。

『島』という設定が古い地蔵に風土的な物語性を持たせている。

梨の花

白井市は白一面の梨の花

一枝にこぼるゝほどに梨の花

春眠

春眠のまなうら虹のごときもの

高志

みち

高志

〃

春眠のぱつと見事に下車したる

麦飯

麦の飯膳飯嫌ひ昭和過ぐ

二杯目の麦飯女ざかりかな

初夏

*手賀沼のスワン声なき夏はじめ

*沼が賑やかなのはむしろ冬である。近年数は減つたけれど渡つ

てきた鴨の大群がそれぞれの種類の声を挙げて騒いでいた。それ

が引き上げると、棲みついた瘤白鳥の小群が頸うなだれて遊弋す

るのみ。夏初めの沼にふと寂しさを感じる時である。スワンとい

うなめらかな語によつてきれいなリズムが生まれ、情緒が深まっ

ている。

鶺鴒

夕風の殊に荒れをり鶺鴒の声

夕波の川面一羽のはぐれ鶺鴒

柚の花

柚の花ひそかに参る疣地蔵

柚の花風呂の焚き口ほど近く

*柚の花や昔庄屋の長屋門

純白の柚の花咲く田圃道

*庄屋は江戸時代の町人の頭ともいうべき役柄だが両脇に長屋を

抱えた堂々とした屋敷を構えていた。「昔庄屋の」とわざわざ「昔」

幸一

紀子

〃

幸一

敦子

みち

みち

高志

〃

〃

〃

高志

昭七

陽一

〃

の一語をいそえた技が句に一層の風格と重々しさを生んだ。長屋門の脇の柚子の樹もそれに劣らず年月を経た大樹であろう。ゆったりと落着き払ったリズムも時間の流れをとらえて心地よい。

蓮見船 (H28 7.15)

*白鳥にスワンボートとに梅雨風

孝三

水面に雨跳ね上がる梅雨豪雨

高志

鳥肌のやうな水面や梅雨はげし

興正

*白鳥は生物、スワンボートは白鳥を模して作った小舟、二つは共に梅雨風の豪雨に打たれている。白鳥は首を曲げ羽根を水面に埋めて身じろがず、スワンボートは平気で沖を見つめている。

行く秋

秋深し飛行機雲の薄れゆく

健二

此秋の行くや臥床の窓の雲

高志

栗

草分けて足で拾ふや栗の秋

昭七

*さじで食う栗の中身は月の色

啓泰

*栗の色から月に飛躍した発想力が啓泰さんらしく力強い。匙で掬って食ったお蔭である。栗名月に響く。

沢庵漬け

沢庵漬母が塩振り僕が踏む

高志

神無月

*裏川の鯉の色増す神無月

多美子

*釣りが目的で結婚早々手賀沼のほとりに越してきた。片目を失って釣りは止めたが、今でも淡水魚は大好きだ。少年の頃、釣ってきた獲物は母の手で食卓に出た。恵比須講近い神無月ともなれば、家の裏を流れる野川の水もやや涸れて冷たく澄んでくる。深ん所に身を潜める鯉は、背の色まではつきり見えてくる。この季節、鯉は太つてきている。青黒い真鯉でなく稀にいる緋鯉、だったら、冷え込みとともに更に色が冴えよう。釣り達者な老翁に鯉は一日一寸釣ると教わった。尺鯉なら十日通う気構えが要る。それほど鯉釣りは難しかった。追憶と望郷の念を誘われる季節感豊かな佳句である。

枯野

がうがうと風が鳴るなり枯野原

高志

*一筋の繁道の通る枯野かな

健二

枯野行く風飄々と髯を吹く

昭七

*一筋の道が枯野の中に通っている。通る人が少なく草が茂っている道である。繁道しげみちは万葉集に「大野路おほのちは繁道茂路しげみちを使つたものである。我が人生は斯くの如き枯野である。枯野の寒往けば則ち暑来たりであつて青々とした青野になる未来があるのだという「かな」である。その中の繁道を行く。

炬燵

*朝まだき母が炭足す炬燵かな

健二

父母のゐてはらからの居て炬燵かな

多美子

*早朝まだ明けやらぬ部屋の中で母がひとり起きて炭を継いでいる。いつも家族の知らぬ間に起きて働いていた昔の母親像である。炭を足す炬燵なども懐かしい。これは掘炬燵で、部屋の暖房はこれだけだったかも知れない。「まだき」は「未だし」に近いと辞書にあり、久しぶりに聞く語であるけれど、効果があつて昭和の回顧的な情緒を強めている。

新年一般 (H29)

三日月と太白睦む二日かな

高志

句集手に母の笑みます去年今年

正美

白鳥が啼きつつ飛んで初日の出

高志

書初や和気致祥和気致祥

高志

明けきつてみな幻の除夜の鐘

幸一

*老いぼれといはずに慈姑召し上がれ

みち

*姑と嫁さんの会話。「老いぼれ」「老いぼれ」なんておっしや

らずにもっと「くわい」を召し上がれと嫁さん。くわいをカナ書きせずわざわざ「慈姑(慈悲深い姑さん)」としたところに皮肉

がひかる。皮肉たっぷりなの句。

梅

ポップコーンはぜるごとくに梅ひらく

正美

寒梅や枝に触るゝまで絵馬の嵩

孝三

雪解

雪解や球根既に目覚めをり

陽一

*雪解村茂吉の肉声流れけり

みち

*茂吉の故郷に近く多くの名作の残っている上山、そこに茂吉の自作朗読の録音が聞こえるのである。歌は何か。上山であればさしあたり「朝来れば銃に打たれし白き鬼・」か、「ふた別げさまに聳え給う蔵王の山・」か、僕も自作朗読は録音で聞いたことがあり、独特の野性味がある荘重な読み方には感動した。ゆかりの土地で聞くと一入であろう。肉声の語が茂吉好みの語感を伝えている。茂吉はこんな肉体性を引き摺った生々しい措辞が好きであった。

東風

多美子

東風吹くや天満宮の太鼓橋

孝三

*手賀沼やひかり満面東風の坂

孝三

東風吹いて海鮮やかに藍となる

昭七

*我孫子は南北手賀沼を圍繞する丘陵地に発達した町で、数多い坂と谷津のすべてが手賀沼へ向いている。どの坂を下つても春光漲る沼が目の前に広がる。今年もまた東風の季節。春の到来を坂を吹いてくる風に実感するのである。

涅槃

高志

*金棒を放り赤鬼涅槃哭く

高志

竜王は舌を長出し涅槃哭く

高志

涅槃哭く迦陵頻伽は尾を立てて

宏之助

*この世の終わりとみな嘆く秋嘆場の絶頂で、勇猛な赤鬼までもが大事な金棒を放り投げ徒手空拳を突き上げ慟哭せし居られない。仏滅の悲嘆ふりを喜劇的景景を捉えることで描き出す俳諧味が秀逸。

啄木忌

* 又も来る時代閉塞啄木忌

銀座にて國訛聞く啄木忌

銭湯の煙もくもく啄木忌

* 啄木は郷愁と甘い感傷だけの詩人ではない。働けど働けど楽にならざる生活の根底にあるものが政治と社会の仕組みである事を発見し、それを告発する。評論「時代閉塞の現状」（明治四十四年八月）がそれである。日清・日露の二つの戦役に勝利し、近代化の波に乗り始めた時代のまえに立ち現れたものは権力の強権政治と人々の閉塞感であった。「今こそこの現状に宣戦すること」「新しい明日の社会の考察に立ちあがるべき」ことを啄木は主張する。彼が力尽きて倒れるのはその二年後であった。いま僕らの周囲と同じ閉塞感が立ち込めだしている。「又も来る」という冒頭の一句に作者の強い怒りが踊っている。

霞草

咲き満ちて鉢を溢るゝ霞草

鮫函鑑披く机上や霞草

捨てがたき母の手紙や啄木忌

幸一

健二

正美

陽一

高志

*霞草卓に白樺カレー食ふ

*正式には「白樺派のカレー」と言う。我孫子の「白樺文学館」で売り出してより今は近郊のスーパーにもある。この回顧のカレーの皿とカスミノウとは何故か似合うのである。特殊な固有名詞がよく生かされている。

新茶

新茶買ふ東山三条商店街

カステラの到来物と新茶かな

新茶飲み米寿の人と囲碁を打つ

雛唄粟

*ひなげしや子規の生誕百五十年

*正岡子規は慶応三年（一八六七）に生まれたから今年（二〇一七）は生誕百五十年になる。その一生のやるせなさをいつも思う。先に長谷川權の新しい子規像を描く時という文芸批評を紹介した。掲句は子規を雛唄粟に象徴させようとした意欲ある句だ。健二句の通り、舊は地を向いているがやがて徐々に上向き日を受けて咲きやがて萎び散り、坊主のような種房を残す。この花ははかなげに見えて結構強い花である。子規が生まれてまだたった百五十年である。ひなげしを眺めてつくづく子規を思うのである。単に可哀想であったという俗な心に支配されてはいけなないと。新しい子規を考えよ。

お辞儀してやがて咲き出すポピーかな

宏之助

幸一

健二

正美

敦子

興正

雛罌粟の斯くしをらしき珠蕾

高志

美術の秋

翡翠

翡翠の残像ひとつ遣りけり

興正

モスリンの壁なす白布美術展

陵の崖に翡翠巢を造る

宏之助

リバティプリントの無数の孔雀美術展

翡翠の一閃富士の真下なり

みち

二科展彫刻縞馬の紛れ込む
秋鯖

陽一

黒鯛

横たはる黒鯛の鱗の黒光り

高志

大ぶりの秋鯖むしるボスポラス

陽一

尾鰭まだ振りをり黒鯛の活き造り

宏之助

火膨れのでき秋鯖の焼き上がる

みち

黒鯛釣るや行者ヶ窟の波の音

陽一

秋鯖の味噌煮と母の鼻歌と

興正

青林檎

青林檎ここは信濃の古戦場

宏之助

*酒は剣菱秋鯖は塩焼きに
秋鯖を見るだけ見てくる那珂湊

啓泰

受けて見よ抛るよ恋の青林檎

幸一

*日本酒は、食べ物と同時に口に入れるお酒として作られている
とか、下戸の筆者にはわかりませんが、作者はそれをよく存じ
なんでしょう。口中に剣菱と食べ物が同時に入って、もぐもぐ咀
嚼しているうちに、酒と食べ物が最上のハーモニーを奏する瞬間
が、安易に訪れてくるところに剣菱が丁度いいとか、お互いの味
の深さをグレードアップさせる酒らしい。食べ物としての秋鯖は
塩焼きに限ると作者は主張しているようです。「は」の繰り返し、
それに「に」と省略を効かし、又初めに還るリズム、お酒はぬる
めの燗がいいとかいう演歌もありましたね、その世界にも通底し
ています。

森林浴

*森林浴みんなであうたふ木遣歌

みち

朝顔の実の弾けては草に入る

昭七

木漏れ日の中歩みつつ森林浴

正美

朝顔の実の弾けては草に入る

*散策ガイドがついて森林浴の遊歩道を歩く。ガイドは先の木下

遊船のガイドと同じくよく喋る。その自慢が御神木伐採跡地への

案内である。御杣始祭みまはじめまつりがここで行われたという切株の

前で歌詞を手には捧げみんなに木遣り歌を歌わせる。作者が書き取

ったその一部は「木曾の深山で育てたるヨイヨイヨイ日ノ本一の

この檜ヨイヨイ伊勢の社に納めますエンヤラ ヨーイトセ

ヨイシヨイシヨ」というものである。

朝顔の実

昭七

蒔かぬのに今年も咲きて白朝顔
咲き終えて朝顔の実は同じ色

啓泰
正美

鶇

鶇見てゐる「だるまさんがころんだ」

高志

歩いてはペンギン立ちの鶇かな

みち

*賑はしく来てぽつねんと鶇かな

幸一

*大群で渡ってきた鶇が何処で別れるのか一羽づつになり狭庭に
まで現れるのが不思議である。他の鶇類もそうである。アトリな
どは賑やかに群で轉りながら冬を越すのに。「ぽつねんと」と、
独り空を見ている鶇。

石路の花

*裏庭に日の廻りきて枇杷の花

正美

清澄の石路の花咲く石の庭

敦子

*日陰にあつてはそれと判らないような目立たない枇杷の花。密
かに咲いている花に午後の日が当たるとようになって、ああ枇杷が
もう咲いているなと気づくのである。「日の廻りきて」にひと日
の生活の経過がそれもひそやかに過ぎて行く。

木の葉

木の葉雨北へ傾るゝ風に乗り

みち

木の葉散りゆく溜め息のリズムにて

陽一

木の葉降るブリキの屋根の鶏小屋に

みち

人参

*人参は皆ピノキオの鼻に似て
埋火のごとき人参抜きにけり

みち
興正

*まういえば近頃の長円錐形に整った形の人参は挿絵にあるピノ
キオの鼻そっくりである。普通なら「ピノキオの鼻人参に似る・」
となりそうところ、「みなピノキオ」と、ピノキオが人参の数
だけ増殖しそうなイメージが甚だ面白い。

マスク

*マスクせる看護師のみな美貌なり
マスク顔すれちがいざま振り返る

幸一
正美

手術室吾を覗きつマスクの目

高志

*入院の臥床から見るマスクの看護師は皆美貌である。マスクの
瞳のきらきらしていた病棟の看護師を今も思い出す。大羽さんと
いう看護婦が私の世話を焼いて私が寝たきりから起き上つて見
た彼女が実は小さかったのに驚いて「小羽さんですね」と云つた
ら「まあ！」と身をくねらせて私を睨んだ思い出があります。

新年一般 (H30)

将門の井戸に社に初詣

高志

膝までの辞儀して御慶申しけり

〃

裏白に日の当たりたる昼餉時

興正

撮るだけの舞妓との縁お正月

幸一

南へ野川の伸びる初景色

みち

格子戸の漢方薬屋鏡餅

多美子

参道に神説く牧師初不動

〃

懐妊を事務服に秘め初写真

宏之助

*目隠しがきついとぐづる福笑ひ

孝三

初日の出広がる茜鳩が飛ぶ

正美

初詣蝋燭の灯のゆらぎをり

敦子

*源氏物語に、冷泉帝が帝という公の地位を去って、好きなように過ごしたいとずつとお考えになり、ぐづぐづ仰せにもなつていられたが、体調を崩されたことをきっかけにして急に退位されたという一節があります。目鼻口が珍妙な顔に仕上がり座が笑いに興じる日本の伝統的な遊び、それよりも目隠しがきつくて目ん玉が圧迫されるのはいやだと愚図っている子の心理と本質の所は同じですね。今の平成の世にも通底していると思いましたが如何ならんです。

針供養

高志

*まち針が豆腐に咲いて針供養

高志

拝殿に磁石備へて針供養

みち

針供養遊女の墓を先づ拝む

宏之助

*使い古した針を柔らかい豆腐蒟蒻に刺してねぎらう、器物にも魂があるという国民性は面白い。色とりどりの待ち針が刺されて花が咲いたと観察したのである。

黄梅

黄梅の下が卒塔婆返納所

宏之助

黄梅や沼のひかりと風の音

高志

黄梅やべつこう飴を持つ子供

敦子

鷹鳩に化す

高志

*鷹鳩と化しひねもす回る山手線

高志

鷹鳩と化して押しゆく三輪車

興正

鷹鳩と化し公園に長居せり

みち

*難しい兼題。「春季」とされる由来も知らないけれど、まあ、「春は眠くなる」とも言うし、掲句での取り合わせが秀逸で、「ひねもす」の措辞が蕪村の「のたりのたり哉」を直ちに連想させるところ、春の海と山手線の違いはあれ、春眠の座席に凭れて一周したくなります。

春田

幸一

*水張つてさざなみひろぐ春田かな

幸一

連嶺に白馬駆けて春田打つ

昭七

山の根の水流れ入る春田かな

健二

*これは代田になる直前の春田です。我が家前方の手賀田圃でも見られます。強風をよくある仲春の下総の春田といつてもいいでしょう。一か月余り先に来る田植の準備が始まっているのです。風が来て水面を漣がさあーと広がる春田を諷詠して臨場感があります。即ち生活感。

しゃぼん玉

水鉄砲しゃぼん玉打つ小豆大

高志

スイングを振れば多産のしゃぼんだま

しゃぼん玉空へ砂場へブランコへ

*風あれば風のゆくみち石鹸玉

*人それぞれに通いなれた道があるように、風にもそれぞれの風の行く道があるらしい。風に乗り列をなして流れていくシャボン
ダマに作者は辿ってきたおのれの人生をかさねている。

柳絮飛ぶ

柳絮飛びゆき着くところ池の中

朝貢の琉球使節柳絮とぶ

利根川に白波立って柳絮飛ぶ

柳絮とぶ瘤白鳥は頸を立て

スカイツリーの川縁を柳絮とぶ

母の日

母の日やいくたび問へど百といふ

母の日やお釜の底の焦げごはん

松落葉

武松の気象公園松落葉

松落葉黒板塀の城下街

松落葉黒潮遠く離りつつ

苔寺の苔に散り敷く松葉かな

松葉散る山椒魚の谷深し

築

正美 //

興生

みち

興正

高志

陽一

考三

考三

みち

幸一

高志

昭七

陽一

宏之助

健二

築を守る月がありけり峰の空

とどろける雨中の築の在りどころ

魚もろとも築簀を上り水飛沫

夏の蝶

夏蝶の舞ふも沈むも崇徳陵

秋燕

醬匂ふ駅に見送る帰燕かな

燕帰る南の島の日本語

露

ペランダの手すりのくもり露微塵

草の露ベンチに残る子供靴

下り築

下り築横たはる鮎跳ねる鮎

紅葉も流れ着くなり下り築

流れくるものに空缶下り築

山椒の実

昨夜の雨のあとの日差しに山椒の実

山椒の実噛めばびりびり口震へ

芭蕉忌

東の明けの明星翁の忌

時雨忌の羽根破れたる鴉ゐて

芭蕉忌へ水陸両用バスに乗り

幸一

//

高志

幸一

素子

孝三

高志

敦子

高志

正美

みち

素子

高志

高志

陽一

宏之助

宏之助

芭蕉忌のポストに何か届く音
ウキウキと一步踏み出す芭蕉忌に

軸かへる心の一文字芭蕉の忌

芭蕉忌に霧のとばりの筑波山

鼬

火の色の残像芦間の鼬かな

農道の轢死の鼬吹かれをり

枯蘆

枯葦原何ぞ明るき分け入れれば

大利根の枯蘆原に来て哭けり

枯芦や対岸走るトレーラー

白鳥

陸の白鳥家鴨と同じ歩きして

学校も墓も田の中白鳥来

日輪を負って白鳥高く飛び

新年一般 (H31)

元日は維納管弦楽団新年演奏会

初春狂言子役の声のよく透る

キャンパスの守衛と御慶交しけり

蹤いてゆく鎌倉古道初詣

盛装の男子の埴輪お正月

みち

正美

素子

高志

陽一

みち

高志

高志

宏之助

敦子

みち

昭七

高志

高志

宏之助

高志

高志

高志

高志

高志

高志

高志

いちまいの海生みきりし初日かな

鳶舞へるみさき七福詣かな

送電塔連なる沼や初日の出

吹越

吹越や与謝野晶子も来し出湯

吹越や山頂駅のドア開き

野焼

渡良瀬の野焼の炎屏風立ち

野火止や野火と野火とが会うところ

春の月

日が沈む中天春の六日月

近江より戻りて仰ぐ春の月

沼暮れて曙橋に春の月

蜷

蜷のひげ水底探りつつ進む

蜷の道微粒砂動く流れあり

蜷の子の分速三分の速さかな

蓮見船 (R1 7.19)

蓮を見て蒲見て傘寿を自祝せる

*あそこにもここにも菖蓮の沼

空にとんび蓮見しながら沼巡る

野分けして蓮の葉皆裏返る

幸一

興正

健二

高志

高志

高志

高志

高志

高志

高志

高志

高志

高志

高志

高志

高志

高志

高志

高志

高志

高志

高志

四日目の蓮の花托の黄色とは

みち

*長梅雨の今年、ぐずついた天氣が続き、花は咲いていませんよと小池ポートのおかみさんから電話があったが、大丈夫俳人は何でも見ますからということで、日程を変えることなく出船したら、掲句のようにあちこちによく見れば蓮の蕾が水面に顔を出しているのを見た。蕾でも葉群の中に見つけるとうれしくなる気分が出ています。

以上で兼題句会を終えました。以後は当季雑詠として句会を行っています。

あとがき

白金葎十周年記念号の合同句集は毎月の句会と春秋の吟行会の俳句から自選したもの並びに兼題句を私が選んで収録したものです。前回は俳句とエッセイという副題を付けて一冊にしましたが、今回はエッセイを別冊に致しました。まだエッセイの編集作業が残っていますので、その出版はしばらくお待ち下さい。別冊は、毎月の「芭蕉の軽み以後」と時々のお話休題、昭七さんの宮沢賢治・泉鏡花の断想の作品集並びに健二さんの沼のほとり・本誌の読後感などのエッセイを収録して二百頁に達する大部な著作になっています。今年には西暦で二〇二一年。私が俳句実作を始めたのが昭

和六十年（一九八五）。三十六年間の俳歴でしかない。でも芭蕉の文章に触れたのが昭和三十四年（一九五九）だから六十年を越したことになる。私は山口誓子先生の天狼に投句して毎月の八重洲句会にて誓子先生のお顔を拝していた。朝日と東京新聞の選者をされていたので毎週投句を欠かさず結構よく載った。天狼はその入選句を投句しても落とされることもあり、非常に厳選であった。投句して六年目に選評のある四句選に入ったが翌年逝去されたので私は先生晩年の弟子の一人と思っています。その時先生のお言葉「天狼に満ちていた私の俳句精神を皆様で受け継いでお励み下さい。」というハガキを受け取って、はげまなくちやあと思っただけでも、格に入り格を出でよという言葉もあるから、もっと季語を知らなくちやあならぬと思い、自然観察会や行事取材などに歩き回った。こんなことを書いてみるとまた切りがないことになるので切り上げなければなりません。俳縁のあった方々を書けばこれも切りがない。只、今回は白金葎に便りを下さった方々の添え書き俳句も選の対象にして掲載した。白金葎をおやめになった方の俳句は本人の承諾を得て掲載した。吟行句会に参加された俳人の句も同様の扱いにしました。これを書いていて、誓子先生の自伝である、来し

方を読みました。これが非常に面白いので、真似して私の来し方を書こうと思いましたが、私はそんなたいそうな男ではないし、なんでもない人間なんだから、端からみちさんが止めとけというものだからここであとがきは終りにします。2021/4/16記

白金葎 合同句集 令和3年4月発行

編集・発行人 光成高志 (Tel 080 - 6250 - 1839)

発行所 〒270・1119 我孫子市南新木2 - 14 - 17

振替口座 (株) ゆうちよ銀行 10520 - 421361

シロガ ネヨシ 宛

製作印刷 喜怒哀楽書房

〒950 - 0801 新潟市東区津島屋7 - 29 Tel (025 - 250 - 9555)